

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策

③教育効果・成果についての検証と教育プログラムを改善するシステムの構築

●九州工業大学生命体工学研究科生体機能専攻

「グローバル研究マインド強化教育プログラム」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

- ・国際マインド強化プログラムにおいて、帰国後成果発表を行った学生の意識やその後の指導教員の所見からプログラムの有効性は十分確認できたが、成果を示す指針としてTOEICの点数を使用した結果短期留学の前後だけでは点数増加に直結しなかった例もあり評価が困難であった。
- ・学生個人個人で、能力や性格が異なるのでシステムチックに効果を上げるプログラムの構築が困難であった。

(苦労したこと、困難であったことの詳細な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

評価対象が英語という性格上成果が表れるのに時間がかかることを十分考慮して実証をする必要があった。たとえばプログラム受講学生の学年進行に合わせて受講後も継続してTOEICを受験して経過を見るなどの工夫が必要であった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

1年目の参加学生の結果を基に「国際マインド強化プログラム」と「英語漬けPBLプログラム」との連動を強化し、国際マインド事業支援員として外国人研究者を採用し、英語学習の効率化を目指したが、明らかな成果が出るまでには至らなかった。